19 世紀末フランスにおける家庭教育像
―― 週刊誌『ラ・ファミーユ』の考察を中心に ――

井　岡　瑞　日

京都大学大学院　人間・環境学研究科　共生人間学専攻
〒 606-8501　京都市左京区吉田二本松町

要旨　本稿は，公教育体制が成立した 19 世紀末フランスの家庭教育像を，週刊誌『ラ・ファミーユ』*La Famille*（1879-1921）を手がかりとして考察するものである．『ラ・ファミーユ』は，共和主義に親和的な立場をとる中間階層をターゲットとした家族向け雑誌であり，多数の人々に読まれていたことが想定できる．そこでは，情愛あふれるあたたかな家庭空間で，母親が情操豊かに我が子を育てるという家庭教育イメージが表された．こうしたイメージが雑誌メディアを通じて量産されたことは，家庭教育が，母親の愛情によって特徴づけられる，学校教育とは分化した教育形態として，人々の間に浸透しつつあったことを示唆していると言える．

は　じ　め　に

(1)　本稿の目的

フランスにおいて，第三共和政の成立は，カトリック教会の影響力が家庭生活やその教育活動に深く根ざしていた時代の終焉でもあった[1]．これ以降，家庭教育を取り巻く状況は，様々に変化していくこととなる．例えば，P・ドュアニングは，19 世紀末における育児学や小児医学，家計学などの発達により，これら多様な立場からの眼差しが家庭教育へ向けられるようになっていったとしている[2]．一方，当時は，初等教育の義務・無償・非宗教性の確立や女子リセ・コレージュの創設に代表される諸々の公教育化政策が断行された時代でもあった．こうした中，第三共和政は，教会に代わる新たな宗教教育の担い手として，家庭への注目を高めていった[3]．また，公教育を推進する立場から，「家庭における教育」éducation dans la famille が学校教育の対概念として語られ，両者の連関が模索されるようになる[4]．このように，公教育体制の成立という点においても，家庭教育は変容を迫られていったと考えられる．

しかしながら，この時代の家庭教育が，実際にどのように行われていたのかという点に焦点化した研究はほとんど存在しない．その理由は，「家庭教育は日常生活のリアリティーに深く食い込んでいるがゆえに，科学的研究となることは極めてまれ」[5] であるというそもそもの事情に加え，「われわれの想像以上に根が深い」「フランスの公教育における『世俗性原則』をめぐる問題」[6] にあると考える．公教育体制の成立過程は，教育をめぐる国家と教会との熾烈なヘゲモニー争いの終幕であり，多くの研究者の関心を集めてきた．その結果，人々の生活の中で確かに行われていたはずの家庭教育は，日常的な，とるに足らないものとして等閑視されてきたのではないか．むしろ，いくつかの先行研究が着目してきたのは，学校教育化が十分でないために，私的領域で行われるべきとされた第二帝政期以前の女子教育である[7]．そこでは，女子修道院が女子教育の主翼を担っており，家庭はその傘下において，娘に宗教教育や家事の手ほどきを行ったのである．

公教育体制が完遂した 1880 年代から 1890 年代にかけて，人々はどのような家庭教育のあり方を模索し，実践したのか．執筆者は，この問いを明らかにするために，プレス法（1881）制定に後押

しされて，加速度的に興隆しつつあった雑誌メディアに着目した．日常生活において活字文化が重要な役割を担っていた当時，雑誌メディアは人々の規範形成に多大な影響を及ぼしたと考えられる．この点で，雑誌史料をひも解くことは，家庭教育という「日常生活のリアリティー」に接近するための有効な手立てとなろう．本稿では，家族を読者対象とし，教育についても多く言及した週刊誌『ラ・ファミーユ』を史料とする．以降の章では，この雑誌の紹介と，そこに表れる家庭教育像について，言説及び図像を中心に読み解いていく．結論を先取りすると，『ラ・ファミーユ』からは，子どもの家庭教育が母親の愛情に結び付けて語られるという特徴が析出された．こうした家庭教育のあり方が，この時期にメディアを通じて流布されたことの意味は何か．公教育化との関連において，最後に若干の考察を加えたい．

(2) 分析概念としての家庭教育

フランスにおいて，「家庭教育」éducation familiale という語彙が，社会学的，もしくは心理学的用語として市民権を得たのは，人口統計学や家族社会学，家族史研究が脚光を浴びた 1980 年代以降のことである[8]．先述したように，19 世紀の文献に登場する「家庭における教育」は，学校教育を前提に，その対概念として用いられる傾向にあった．本稿では，家庭教育を，こうした歴史用語としてではなく，「両親が，我が子に対し，何らかの教育的効果を期待して働きかける全ての行為」という一つの分析概念として用いることとする．次章以降で考察するように，当時の雑誌メディアにおいて，家庭教育を学校教育の対概念とする見方は，必ずしも普遍的ではなかったからである．ここで述べる「何らかの教育的効果」とは，19 世紀ラルース大辞典の「教育」の項にあるように，「身体面，精神面，及び知能面での能力を発達させること」[9] とほぼ同義であると考えてよい．また，両親の家庭教育役割は，時に祖父母をはじめとした肉親や家庭教師などによって代替されたと考えられる．このため，本稿では，家庭教育の担い手として，両親だけでなくこれらの人物も視野に入れて考察していく．

1. 史料，『ラ・ファミーユ』について

『ラ・ファミーユ』*La Famille*（図 1-1）は，1879 年から 1921 年までパリを中心に刊行された週刊誌である．表題の通り，夫婦とその子どもを中心とした famille（家族／家庭の意）に読まれることを企図した雑誌であった（図 1-2）．そのため，初期の副題「旅行，小説，モード，観劇，ニュースなど」が示すように，全 16 頁の誌面は，連載

図 1-1　1890 年 1 月 5 日号の表紙

図 1-2　1879-1880 年版の口絵

小説，各種コラム[10]，モード，文芸評論，料理や裁縫をテーマとした囲み記事，挿絵など，多種多彩な記事群で構成されている．値段は，1879年の初刊当時で，一部 15 サンチーム，定期購読は年間 8 フランであった．発行部数は不明だが，フランス北西部の地方紙『ル・メッサン』*Le Messin*（1884-1947）の「挿絵増補版」supplément illustré として，その定期購読者に無料配布されていた点や誌上コンクールの応募作品に対する投票数[11]などから，多数の読者に読まれていたことが考えられる．本稿では，初刊年の 1879 年（第一号は，10 月 12 日に発行）から 1899 年までの計 21 年分を考察対象とする．

初刊年から 1888 年までの 10 年間は，パリの目抜き通り，ショッセ・ダンタンにあったヨンヌ社 l'édition de l'Yonne によって刊行されていた．ヨンヌ社は，1881 年から 1882 年にかけて首相を務めた L・ガンベッタが創刊した『共和国フランス』*La République Française*（1871-1924）の姉妹紙『小・共和国フランス』*La Petite République Française*（1876-1938）を 1880 年から 1882 年まで刊行していた他，複数の雑誌や書籍類を出版していた[12]．『小・共和国フランス』は，1880 年時点で 16〜19 万部を売り上げ，日刊紙の中では『プチ・ジュルナル』*Le Petit Journal* に次ぐ人気ぶりであった[13]．当時の『ラ・ファミーユ』の編集長は，ポール・デグルモン[14]という新聞小説家であり，その複数の作品は『小・共和国フランス』に掲載されている．その後，『ラ・ファミーユ』は，1888 年と 1894 年の二度にわたり刊行元の住所を変更している[15]．しかしながら，本稿では，基本的な誌面構成や運営方針が変わらないなどの理由から，考察対象期を連続するものとして考えることとする．

『ラ・ファミーユ』の読者像として，共和主義に親和的な立場をとっていた中間階層が想定できる．このことは，本誌の公教育化政策に対するスタンスをみるとよく分かる．例えば，女子リセ・コレージュの創設を定めた女子中等教育法，通称カミーユ・セー法（1880）を「素晴らしい法」[16]と評価し，その内容を詳説するにあたって「我が読者諸君，特に女性読者の皆さんは，私（記者：執筆者，以下同様）に感謝するだろう」[17]と述べている．女子リセ・コレージュの利用者が，教師や小企業経営者，事務職員を中心とした左派寄りの中間階層出身者であったことは，F・マイユールによって明らかにされている[18]．中間階層とは，『共和国フランス』の創刊者であるガンベッタが言うところの「新しい社会階層」nouvelles couches sociales[19]と考えてさしつかえなかろう．誌面からは，あからさまなブルジョワ志向とまではいかないものの，余暇を楽しんだり，モードや室内の装飾に心を砕くなど，一定以上の豊かさを享受したいと願う読者の欲望がうかがえる．

読者像のもう一つの特徴として，家族関係や家庭生活を重視していた点が挙げられる．『ラ・ファミーユ』の挿絵には，中睦まじく寄り添う家族の姿が頻繁に描かれている．また，「家族が住む家」と題された記事では，「子どもの成長のために，健やかで，元気を回復させる場」[20]という家庭観が示されている．このように，『ラ・ファミーユ』の読者たちは，家族が親密で，家庭生活が健全であることに心を寄せる人々であった．さらに，誌面において，「主婦」ménagère[21]という言葉が散見されることにも注意を促したい．例えば，外国や地方の料理レシピを紹介する 1894 年の連載記事「新米主婦のノート」は，「共に麗しき『コルドン・ブルー』を目指しませんか」[22]と呼びかけ，女性は「利便性と楽しみを兼ね備えた」「良き主婦」[23]であるべきと主張している．ここから，「主婦」として自ら家内の仕事に従事することに喜びや生きがいを見出す女性読者の姿が浮かび上がってくる．

以上で論じた推定読者像から逆照射されるように，『ラ・ファミーユ』の特徴は，①公教育化政策に賛同する共和主義的立場，② famille 家族／家庭をキーワードとする方針，の二点に集約できる．この二点は，本稿において，『ラ・ファミーユ』を史料とする所以に等しい．まず，①によって，公教育化を背景とした家庭教育のあり様を探るという，本稿冒頭で示した課題に迫ることが可能となると考える．また，②によって，『ラ・ファミーユ』に表される庭教育像像のみならず，そのバックボーンとなる家族観や家庭観について

もうかがい知ることができよう.

2. 家庭教育の不確かさ

『ラ・ファミーユ』の読者が，家内の事柄に強い関心を寄せる人々であったことは前節で述べたが，その一つに教育問題があった．それは，コラム記事や連載記事，投稿欄において，頻繁に語られるテーマであった．ここで注意したいは，誌面において，「家庭教育」という言葉がほとんど使われていない点である．少なくとも，『ラ・ファミーユ』においては，学校教育と相対するところの「家庭教育」という概念は，あまり見受けられないのである．では，家庭教育はどのようなものとして理解されていたのだろうか．1895 年 6 月 30 日の投稿欄「今週の質問」は，「家庭における教育」という表現が登場する数少ない記事であり，上記のことを探る上で，重要な手がかりを与えてくれる．「今週の質問」は，1895 年に登場し，その後，1895 年は毎号，1896 年以降は，数号に一度の割合で掲載されている．女性規範や夫婦関係，友情，教育などに関しての事前に予告された質問に対し，読者から寄せられた 5 件から 10 件超の回答を紹介するというものである．

1895 年 6 月 30 日の質問内容は，「家庭で育てるのと寄宿学校 pensionnat で育てるのでは，どちらが子どものために良いか」[24] というものであり，これに対して，読者 5 人の回答が示されている．対象となる性別や年齢層が記されていないため，回答者が想定している状況にはそれぞれ若干の違いがあるものの，雑誌と読者との間において共有されていたおおよその教育観を知ることができる．この質問の背景には，1880 年 11 月 22 日の上院議会において，J・フェリーが，「寄宿制は必要悪だ」と述べたことを契機として，その是非を問う議論が活発化するという事態があった[25]．女子リセ・コレージュも，激論の末，通学制を基本とすることが決まっていた．時代は，第二帝政下で隆盛を極めた女子修道院が，1880 年 3 月 29 日の政令を機に衰退に向かう移行期にあった．その多くが寄宿制であった女子修道院は，10 歳前後から 15 歳頃までの期間，女子を「世俗の世界から隔離」[26] することで，「少女から娘への一種の通過儀礼」[27] として機能した．寄宿制の是非を問う議論は，男女同様に起こっていたのである．以下に，5 人の回答（便宜的に①～⑤とした）の要点を示すため，その抜粋を記した（下線は執筆者，以下同様）．

①可能なら，両方で行うのが良い．［中略］（かつて）私は半寄宿制の学校にいて，次のような状況にあった．
1. あらゆる年齢層の生徒たちと朝から晩まで共に過ごすことで，互いの個性を知り，皆とより良い関係を築くよう努めた．
2. 一日の終わりに学校を出て，帰宅した．知力の鍛錬で頭は重たくなっているのに，そこは，私の感性を豊かにするためのあらゆることが行われる場であった．私は，毎夜母と過ごした数時間を懐かしく思い出す．それらは，私にとってとても有益な時間であったから．

②［前略］誠実で仲むつまじく，十分に知性があり，ある程度ゆとりある生活を享受している夫婦を思い浮かべてみよう．彼らは自宅で我が子を育て，公立の学校へ毎日通わせるだろう．この場合，家庭における教育 éducation[28] は，最良の寄宿学校における教育の 10 倍もの価値があるのだ．しかし，もし子どもが一人っ子で，溺愛の対象にされてしまう危険性があるならば，優柔不断は禁物だ！質の良い寄宿学校へ任せるのが良いだろう．［中略］この繊細な問題に関して，絶対的な規範は存在しない．教育において，見識ある日和見主義こそが美徳であると思える．

③子どもの性格が驚くほど多様であることを考えると，問題はきわめて厄介であり，解決はたいへん難しいだろう．家庭のみで育てられた子どもは，しばしば甘やかされ，果てはとても自分勝手な人間になってしまう．私は，寄宿学校と家庭との間で，教育が分担されるのが良いと思う．［後略］

④［前略］（寄宿学校の良い面しか見ない）父親は，我が子の性格が，そこで形作られると同時に，歪

められてしまうことを認識できていない．［中略］家庭における教育，しかも子どもに関心を抱く人物による厳格な教育こそが，望んだ目標に到達させるための正当な，そして唯一の方法なのだ．

⑤［前略］子どもの気持ちは，母親でなくて誰が理解できよう．［中略］母親の愛情に包まれて，子どもは強く，思慮深く，誠実な良い子に育つのだ．母親の腕から離れたら，子どもは巣から落ちたひな鳥のように，か弱くなってしまうだろう．

五人のうち二人は，寄宿学校と家庭とが教育役割を分担すべきと考え，残る三人は，家庭で育てることの方が好ましいという見解を示している．また，寄宿学校が家庭より優位であると考える回答者はいない．このことは，子どもが，親元から離れた外部教育機関において一定期間育てられるという旧来の慣習が，もはや当たり前ではなくなりつつあることを示している．それと同時に，勉強のみならず寝食の世話までをも引き受ける寄宿学校が，家庭の教育機能を代替しうるという認識が残存していることも確認できよう．ここから，家庭教育が，学校教育とは未だ完全に分化していない，曖昧なものとしてとらえられていることがうかがえる．『ラ・ファミーユ』において，「家庭教育」という言葉が用いられないことには，こうした理由があると考えられる．その一方で，②や⑤の回答から分かるように，家庭教育が，良きにつけ悪しきにつけ，母親の愛情というそれ特有の性質を持つものとして理解されていることにも注意したい．後述するように，そこにこそ，学校教育との分化の兆しが見て取れるからである．

また，家庭教育と一口で言っても，その内容は，被教育者の性別や年齢層によって大きく異なっていた．例えば，リセ世代の息子の寄宿生活をいかにサポートするかについて論じた記事[29]からは，一定年齢以上の男子の教育について，中心的役割を担うのは学校であり，家庭教育はあくまでその補完的存在に過ぎないという考えがうかがえる．対照的に，同年齢層の娘 jeune fille の教育については，学校教育のみならず，母親による娘の教育が，コラムや投稿欄，連載記事の主題として度々取り上げられる．ある程度成長した男女を比べると，男子よりも女子の方が圧倒的に家庭教育の重要性が高いと考えられていたことが分かる．以上については機会を改めて詳しく論じることとして，次節以降では，より低い年齢層の子ども（児童，幼児の意味で用いる）enfant, bébé の教育について考察する．これについては，娘の教育と比べ，記事数も少なく，主題として論じられるというよりは，他の話題において副次的に取り上げられることの方が多い．だからと言って，子どもの家庭教育が存在しなかったわけではない．次節において，『ラ・ファミーユ』に挿入される多数の挿絵が示すように，それはごく日常的な行為として行われていたのである．

3．視覚化される家庭教育

『フランス定期刊行物及び政界年鑑』において「挿絵入り新聞」に分類されている[30]『ラ・ファミーユ』は，全 16 頁中 3 頁が挿絵にあてられており，表紙絵を含めた 3 枚ないし 2 枚の挿絵が誌面を彩っている[31]．世紀末にかけて，廉価で，挿絵や写真を豊富に掲載した週刊の挿絵入り新聞が，男女を問わず広い支持を集めていく[32]．こうした挿絵入り新聞の代表格とも言える，有名紙『プチ・ジュルナル』の「挿絵増補版」では，政治家や著名人の肖像，国内外で起きた事故や事件，戦争などのきわめて時事的な事物が画題の中心となっており，「日常の生活風景が改めて取り上げられることは少なかった」[33]．これとは対照的に，『ラ・ファミーユ』では，室内でくつろぐ家族や遊びに興じる子ども，街頭や田園の風景など，「日常の生活」が多く描かれていることが特徴である．家族向け雑誌を自負していた『ラ・ファミーユ』にとって，大人も子どもも楽しめるであろうこれらの挿絵は，大きなセールスポイントの一つであったはずである．

では，こうした挿絵において，家庭教育はどのように描かれているだろうか．次頁の表は，家庭教育をテーマとした挿絵の一覧である．挿絵の解説記事「今号の挿絵」欄[34]に依拠しながら，執筆者が選出した（表 3-1）[35]．ここから明らかに

表 3-1　家庭教育をテーマとした挿絵一覧

年月日	タイトル	教育内容（キーワード）	被写体の関係						
			祖父	祖母	父親	母親	男児	女児	不明
ア 1880. 02. 15	Un mauvais sujet	抜打ちで学校を訪問　罰せられる息子				1	1		1
イ 1880. 05. 16	Une difficulté	編み物を教える				1		1	
ウ 1881. 10. 09	La leçon du grand-père	歌を教える　ヴァイオリンの伴奏	1					1	
エ 1882. 01. 15	L'attention distraite	読み書き　猫に気を取られる娘　咎める母				1		1	
オ 1882. 05. 21	La petit patriote	アルザス　一家団欒　愛国心を育む			1		1		7
カ 1882. 07. 16	Il sera général	息子の将来に思いを寄せる　将軍!?	1			1	1		
キ 1882. 11. 12	Le fils ainé de la veuve	弟の誕生　兄としての役割を諭す				1	2		
ク 1884. 08. 24	La leçon de crochet	鉤針編みをする母　関心を寄せる娘				1		1	
ケ 1884. 09. 07	La leçon de bébé	勉強（地理や文法）を教える　上の空な娘				1		1	
コ 1884. 10. 12	La leçon de peche	父が娘に魚釣りを教える　針仕事をする母			1	1		1	
サ 1884. 11. 23	Première notion	編み物の手ほどきをする				1		1	
シ 1886. 03. 28	La marseillaise	祖父が孫息子に「ラ・マルセイエーズ」を教える	1			1	2	(1)	1
ス 1888. 08. 05	La leçon de guitare	ギターの練習　教師の手助けをする母				1		1	2
セ 1889. 02. 24	La leçon de patience	魚釣りをする祖父　静かに待つことを教える	1					1	
ソ 1889. 06. 02	La toilette	犬の世話をする娘　「母性的な」行いを褒める母				1		1	
タ 1890. 06. 08	Une leçon de stratégie	玩具の騎兵隊で遊ぶ孫息子　戦略を立てる祖父	1				1		2
チ 1890. 09. 21	La leçon de lecture	読み書きを教える				1		1	
ツ 1890. 12. 21	La convalescence de bébé	快方に向かう病床の娘　本を読み聞かせる				1		1	
テ 1891. 09. 13	Enseignement maternel					1		1	
ト 1892. 08. 14	La cueillette des roses	バラを摘む　手本を示す		1		1	1	(1)	1
ナ 1894. 01. 14	La première dictée	フランス語の書き取りをさせる				1		1	
ニ 1894. 07. 22	Une pêche miraculeuse	ルソーの影響を受けた父　生きた海老を見せる			1			1	
ヌ 1896. 01. 05	La petite cuisinière	野菜の皮むきに挑戦する娘　見守る母と姉				1		2	
ネ 1896. 03. 01	La petite curieuse	絵本を読み，様々な質問をする娘　答える母				1		1	
ノ 1896. 08. 02	Le petit bain	息子を沐浴させる　母性的な気遣い　良い子				1	1	(1)	
ハ 1897. 10. 17	La leçon de lessivage	洗濯の仕方を教える		1				1	
ヒ 1898. 04. 24	Larrivée des journaux illustrés	挿絵入り新聞の型紙から衣服を作らせる				1		3	
フ 1898. 07. 10	Doux soleil	バラの手入れをしながら実物教育を行う				1		1	
ヘ 1898. 10. 02	La réprimande	勉強時間に遊んでしまった娘　叱責する母				1		1	
ホ 1898. 11. 13	La prière avant le repas	食前の祈りを唱えさせる		1				1	1

※「被写体の関係」の欄について．「今号の挿絵」欄から，他の被写体との関係性や性別が判別できなかった人物（絵の状況から，親族と思われるものがほとんどであったが）については，「不明」としてカウントした．また，男児と女児の双方が描かれている場合，どちらか一方が明らかに被教育者の中心であるものについては，中心でない側の人数を（　）で括った．

なるのは，家庭教育における性役割と教育内容の男女差である．表 3-1 をもとに，挿絵に登場する教育者と被教育者の血縁関係を性別ごとに表したのが，表 3-2 である．まず，被教育者の性別に着目すると，一見して，女児が男児よりも多く登場することが分かる．また，母親と二人きりで描かれることが多い女児とは対照的に，男児は，全ての場合において，複数の家族や親族に囲まれている．次に，教育者である父母や祖父母の登場頻度をみてみると，母親が 23 回，祖父が 5 回[36]，父親及び祖母がそれぞれ 3 回と，母親が圧倒的に多く登場することが分かる．当時，女子教育の目的として「共和国市民の妻・母」の育成が掲げられると同時に，国家介入主義を背景として，民法典において絶対視されてきた「父権」批判が進行しつつあった[37]．後述するように，『ラ・ファミーユ』は，誌面を通じて母性を礼賛する傾向にあった．

表 3-2　教育者と被教育者の性別及び血縁関係

	父親のみ	母親のみ	祖父のみ	祖母のみ	複数の親族等
男児（8）	0	0	0	0	8
女児（22）	1	13	2	1	5

教育内容については，愛国心（オ，シ）や自立心（キ）といった抽象概念を教えられる男児に対

し，女児の教育は，針仕事や家事（イ，ク，サ，ヌ，ハ，ヒ），読み書き（エ，ケ，チ，ツ，ナ，ネ），楽器や歌唱（ウ，ス）など，実利的な事柄が中心となっていることが分かる．これらの教育は，例えば，「小さな料理人」（ヌ）の「一人前の主婦になるための練習を始めよう．君たちは将来，良き母親となり，室内を整え，夫に熱心に尽くすようになるだろう」[38] という解説にあるように，娘を「良き主婦」bonne ménagère に育てるという最大の目的のために行われるのであった．また，1880年頃までは，母親による娘の教育において重要な要であったとされる宗教教育[39]については，挿絵ホの一例のみでしか描かれていないことにも注意したい．以上のように，低年齢層の子どもにおいても，男児よりも女児の方が，家庭教育を受ける機会が多かったことがうかがえる．また，男女の教育内容の差に着目すると，母親と女児／男親を中心とした家族に囲まれる男児，家事や読み書きなどの実利的な手ほどきを受ける女児／愛国心や自立心など，道徳面での教育を受ける男児，という構図が浮かび上がってくるのである．

次に，表3-1に関連する「今号の挿絵」をみてみよう．「今号の挿絵」で語られる家庭教育像の特徴は，以下の二点である．対象となる挿絵とあわせて考察する．一点目は，挿絵の中の子どもに対するあたたかな眼差しである．例えば，「そらされた注意」（エ，図3-1）は，猫に気をとられ，学習を中断する女児とそれを咎めようとする母親を描いたものである．ここで，記者が焦点化しているのは母親の怒りではなく，「溌剌とした顔，興奮した目つきの彼女は，気晴らしに遊びたくてたまらない」という，女児の子どもらしい衝動であり，修羅場にもなりかねない状況について「この勝負，子猫にあり．さあ，子猫が（テーブルの）下に降りるか，母親が娘を怒り出すかどちらかだ！」[40] と楽しげに結んでいる．他にも，勉強を教える母親をよそに考えごとにふける女児（ケ）や，遊びに夢中で，祖父の話を「ちっとも聞いていない！」[41] 男児（タ）など，大人の思惑通りにならない子どもが登場する．しかし，「今号の挿絵」の記者は，彼らに目くじらを立てるのではなく，あたたかく，好意的な眼差しを向け，その言動を軽妙な筆致でレポートするのである．

二点目は，母親の愛情や親子間の親密さに強く結び付けている点である．例えば，「叱責」（ヘ）は，勉強時間に遊んでしまった娘と，そのことで彼女を叱る母親を描いたものである．「今号の挿絵」では，笑みが消え，厳しい口調で娘を問い正す母親に対し，「叱責され，後悔し，反省した子どもは，母に口づけされるために，明日はもっとがんばるだろう」[42] と結ばれている．また，「沐浴」（ノ，図3-2）からは，母親の愛情が子どもの成長に欠かせないという考えがうかがえる．記者は，母親が，長女の手を借りながら息子を入浴させる様子を描いたこの挿絵について，「何とあたたかく，愛らしい室内風景だろう！」と感嘆し，続いて，「寒い思いをしないようにというきわめて母親らしい気づかいから，浴槽は暖炉の傍に置かれている．このように愛されているため，彼（息子）は気立てのよい子どもである」[43] と述べ

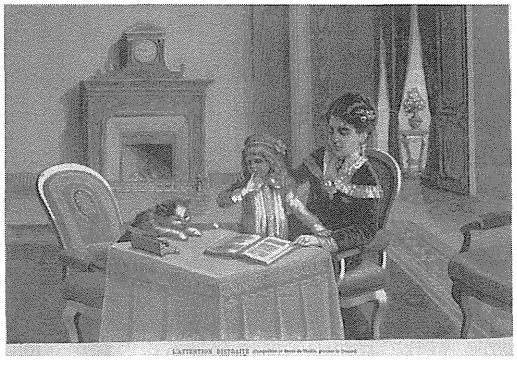

図3-1　«L'attention distraite», *La Famille*, 15/01/1882.

図3-2　«Le petit bain», *La Famille,* 02/08/1896.

ている．このように，読者の視覚にダイレクトに訴える挿絵とその解説記事は，童心主義的な子ども観や母親の愛情，親子間の親密さに彩られた家庭教育イメージを生み出していたと言えよう．

4. 家庭教育の目的と父母像

では，前節でみた家庭教育イメージは，どのような教育観や子ども観，父母観に裏打ちされているのだろうか．まず，教育観について，1896 年 12 月 27 日のコラム記事を考察する．クリスマスの季節に書かれたこの記事は，サンタクロースや幼子イエスを信じなくなった子どもたちをいかにして楽しませるかについて論じており，記者の友人の子育てを紹介している．

一家の母親である私の友人は，クリスマスの重要性を二倍にし，子どもたちの心に思いやりや慈しみを育むために，この祭典を利用する方法を見つけた．

クリスマスイヴの前日に，彼女は，彼女の子どもたちとその友人たちを集めた．［中略］彼らに，貧しい子どもたちのための小さな贈り物を用意させ，プレゼント配りに参加させるのだ．男の子も女の子も，ある子は古いおもちゃを修繕し，ある子はマフラーを編む．みんなしばらく前からこのことを知らされているので，準備ができて手作りの品が多くなるのだ．友人は，あるものは全て利用して（手作りさせ），特に自分の子どもたちに手ほどきをする．このことには，様々な利点がある．まず，子どもたちは，物を再利用し，大切にすることを学ぶ．また，彼らは，しばしば不幸な人のことを考え，弱者に同情することを覚える．このことは，彼らの善意を豊かにするだろう．そして，彼らは，器用になる．何て素敵なこと！［中略］母親に見守られて，御馳走の準備をし，味見することは，料理の才能を伸ばすだろう．［中略］友人の見習うべき素晴らしい教育成果を忘れないでいただきたい[44]．

記事は，記者の友人が，慈悲心や思いやりの心を育む，物作りや料理の腕を上達させる，物を大切にすることを教える，などの複合的な教育目的を果たした点について，「素晴らしい教育成果」と讃えている．加えて，ここで評価されているのは，子どもたちにクリスマスを楽しませるという手段でもって，それを果たした友人の手腕と言えるだろう．このように，母親が，子どもたちが楽しめるよう工夫をこらしながら，情操面を中心に教育を行うという家庭教育観がみてとれる．他者，特に貧者や不幸に見舞われている者に対するキリスト教的な慈悲心 charité や思いやりに関する記述は，目指すべき子ども像の重要な要素として，随所に登場する．例えば，1880 年 12 月のコラム記事では，自分より裕福な家庭に育つ病弱な子どもに思いやりを示した，記者の知り合いの子どもを褒め称え，真の慈悲心について説いたものである[45]．

次いで，どのような父母像が理想とされたかについてみてみよう．家庭教育の主要な担い手であった母親については，挿絵や記事を通して，多く語られる傾向にあった．挿絵には，母親，特に我が子を抱く母親が頻繁に描かれる．いかにも幸せそうなこれらの挿絵について，「今号の挿絵」は，「彼女（母親）からかもし出される幸福な安心感」[46]，「（母性愛は）実生活における何たる甘い詩歌」[47] と賛美している．また，「母と子」という副題が付された 1898 年 4 月 3 日のコラム記事は，母と子どもの絆は深く，女性は，子どもの成長と発達のために『良い母』であらねばならない」[48] と述べている．ここで目指される「良い母親」とは，しばしば「無償の愛」，「献身」といった言葉で形容され，不意の事故で重傷を負い，皮膚移植が必要になった我が子に対し，真っ先に自分の皮膚の提供を申し出た母親の例が挙げられている．一方，これに対して「悪い母親」とは，自身で子育てをしない母親である．その典型的な例として，我が子を田舎の里子へ出し，一度も会いに行かず，乳母が提示した法外な必要経費を払い続ける母親像が描かれている．

子育てを放棄する母親に対する批判は，1896 年 3 月 22 日の「今週の質問」にもみられる．「母親が，自分で我が子の面倒を見ることが絶対的に不可能でないにも関わらず，他人に任せることに

ついてどう思うか」という質問に対し，「自身で養育できるはずの小さな天使を他人に任せるなんて，そんな冷淡で軽薄な女性は，母親にふさわしくない」，「我が子を他人に任せる母親は，神が人類に与えた最も美しい感情，母性愛を持っていないのだ」[49] など，全面的にこれを否定する声が寄せられた．これに対し，1885 年 1 月 11 日のコラム記事は，父親の理想像について語った例である．「一家の父親」と題されたこの記事は，「高名な男性ほど，家庭内の喜びに縁遠く，偉そうに振る舞うものだと思われがちだが，それは大きな間違いである」と始められ，「ディケンズは，彼の子どもたちをとても愛していた．彼らを喜ばせるためなら，やらないことなど何もない，というほどであった」[50] と，作家，Ch・ディケンズの子煩悩ぶりを紹介している．そこでは，母親同様，我が子を深く愛する父親が理想とされ，威厳よりも親しみやすさが重要であると説かれている．

このように，両親，特に母親に求められたのは，我が子を自らの手で育て，なおかつ深い愛情を注ぐということであった．そして，子どもに厳しく接するよりも，親しみやすさを抱かせる人物であるべきとされたのである．

終　わ　り　に

『ラ・ファミーユ』では，「家庭教育」という名目において，その役割や方法論が体系的に論じられるということはほとんどなかった．教育経験が多様であった当時において，家庭教育は，万人に共有されうる自明なものというよりは，やるやらないを含めて個々の裁量に任される，きわめて私的な行為であったと考えられる．それは，時に，寄宿学校制度のような旧来の教育システムに代替されうるものであり，また，被教育者の性別や年齢層によって性質を違えるものでもあった．一方で，『ラ・ファミーユ』は，挿絵やコラム記事を通して，意図的にか，半意図的にかは定かでないが，子どもの家庭教育に関する一定のイメージを発信し続けた．それは，性別役割が明確化した，母親の愛情を基軸とした家庭空間において，母親が情操豊かに子どもを育てるというものであった．こうしたイメージが量産されたことは，家庭教育が，母親の愛情によって特徴づけられる，学校教育とは分化した教育形態として，人々の間に浸透しつつあったことを示していると言える．

しかし，当然ながら，こうした家庭教育イメージは，全ての人々に受容されていたわけではない．例えば，「家庭の雑誌」journal de la famille として売り出され，女性誌の中では最多の発行部数を誇った『ル・プチ・エコー・ド・ラ・モード』*Le Petit Echo de la Mode*（1879-1983）[51]（以下，『プチ・エコー』）には，『ラ・ファミーユ』とは全く異なる家庭教育像が表されている．『プチ・エコー』は，母親に対し，親や教師への敬意や服従心を持たせるなどの道徳面でのしつけを中心に，子どもの健康維持や衛生管理をも視野に入れた家庭教育を行うよう指南した．そこでは，尊敬と服従を介した親子関係が理想とされ，母親の愛情や親子間の親密さは，そうした関係性の構築を阻むものとして非難される傾向にあった[52]．奇しくも 1879 年という同じ年に産声を上げた『ラ・ファミーユ』と『プチ・エコー』は，いずれもプレス・ファミリアル（家族／家庭雑誌）であったという点で共通しているものの，各々の示す家庭教育観については，母親の愛情や親子間の情愛関係をめぐって，対極関係にあったのである．

では，母親の愛情によって特徴づけられる家庭教育イメージが，『ラ・ファミーユ』を通じて流布されたことの意味は何か．これを考える方途の一つとして，まさに『プチ・エコー』のような，立場を大きく違える雑誌史料との比較考察があると考える．保守的で[53]ブルジョワ志向の強かった『プチ・エコー』に対して，共和主義に親和的な立場をとっていた『ラ・ファミーユ』は，女子リセ・コレージュの創設をはじめとする公教育化政策にも積極的な賛意を示した．こうした雑誌が，家庭教育に関しても，自ずと共和主義的な考えを汲みとっていたであろうことは想像に難くない．共和主義的な家庭教育とは，冒頭でも述べたように，学校教育の対概念として語られるものである．フェリー法の立役者である F・ビュイッソンは，自著『教育学・初等教育事典』において，「家庭における教育」は，学校教育に温情を添える存在

として副次的に機能すべきと主張している．すなわち，家庭教育は，「母親の愛情」や「あたたかな空間」といった独自の性質でもって，「人生の見習いの場」である学校教育を補完的に支えるという考え方である[54]．

このように，本稿は，学校教育を前提として理念的に語られつつあった家庭教育が，『ラ・ファミーユ』という一雑誌によってイメージとして複製され，人々の日常生活に流入していた可能性を提示したと言える．この可能性をより広範な事例を用いて検証していくことが，執筆者の今後の課題である．

注

1） P. Durning, *Éducation familiale ; acteurs, processus et enjeux,* Paris, 2006, p. 24.

2） *Ibid.*

3）「初等教育の義務と世俗化に関する法律」(1882) の第二条において，両親が我が子に宗教養育を行うことができるよう，日曜以外の週一日を休みとすることが定められている．

4） 例として，実用的な問答集の形式をとり，版を重ねた『家庭の教育と学校の教育』などが挙げられる．P. Tissot, *L'éducation dans la famille et dans les écoles,* Paris, 1879.

5） 石堂常世「家庭教育研究国際連合組合［AIFREF］の創設と活動」，日仏教育学会『日仏教育学会年報』，1998 年（第 4 号），192 頁．

6） 谷川 稔『十字架と三色旗 —— もう一つの近代フランス』山川出版社，1997 年，11 頁．

7） B. G. Smith, *Ladies of the leisure class ; the bourgeoises of northern France in the nineteenth century,* Princeton, 1981.（ボニー・G・スミス，井上尭裕，飯泉千種訳『有閑階級の女性たち—フランスブルジョア女性の心象世界』法政大学出版局，1994 年．），M-F. Lévy, *De mères en filles ; l'éducation des françaises 1850/1880,* Paris, 1984., I. Bricard, *Saintes ou pouliches ; l'éducation des jeunes filles au XIX siècles,* Paris, 1985.

8） P. Durning, *op. cit.,* p. 50.

9） ただし，19 世紀ラルースの éducation は，この中でも「とりわけ精神面での能力に適用される」ことを留意しておかねばならない．P. Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle ; Français, historique, géographique, mythologique, bibliographique, littéraire, artistique, scientifique, etc. t.7,* Paris, 1865, p. 203.

10） 考察対象期を通じて毎号掲載された「クロニーク」«Chronique» が代表的．1879 年から 1887 年までは，「ショッセ・ダンタンの世捨て人」l'ermite de la Chaussée d'Antin による単独執筆．それ以降は，「アリーヌ・ヴェルノン」Aline Vernon や「サンドリヨン」Cendrillon ら複数の記者が交代で執筆していた．

11） 1890 年以降，度々開催された誌上コンクールは，小説や詩など，回ごとに定められたジャンルの作品を読者から募集し，それらの最終評価を読者投票にゆだねるというシステムをとっていた．1890 年の中編小説のコンクールでは，977 の応募作品に対し，30,043 人の読者が票を投じたと報じられている．«Avis relatif au Concours de nouvelle», 20/04/1890. et «Résultats du Concours de nouvelles», *La Famille,* 26/6/1890. 断りのない限り，以降の雑誌記事引用は『ラ・ファミーユ』からとする．

12） *La Semaine Populaire, L'Armée Française, La Petite Mode, Le Lampion de Berluron,* etc. C. Bellanger et al., *Histoire générale de la presse française t. 3 ; de 1871 à 1940,* Paris, 1972, p. 372.

13） M. B. Palmer, *Des petits journaux aux grandes agences ; Naissance du journalisme moderne 1863-1914,* Paris, 1983, p. 320.

14） Paul. D'Aigremont（1845-1907）本名は Jeanne-Thérèse de Roussen，再婚相手の L. De Roussen はポルケロール島を所有する大富豪であり，夫婦で島内の農場を共同経営していた．P. Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle tome. 17 : supplément 2,* Paris, 1890, p. 1637.

15） 1888 年にペルル通り 5 番地に，1894 年にカデ通り 7 番地にそれぞれ変更されている．当時の出版界において，雑誌出版権の譲渡は日常茶飯であった．

16） l'ermite de la C. A., «Chronique», 23/04/1882.

17） Ibid.

18） Françoise Mayeur, *L'enseignement secondaire des jeunes filles sous la troisième république,* Paris, 1977, p. 193.

19） 商工業者，職人，専門職従事者，教員，事務職員などを指すとされている．J-M. Mayeur, *Les débuts de la Troisième République, 1871-1898*, Paris, 1973, p. 51.

20） A. Vernon, «Chronique; La maison de famille», 30/07/1899.

21） 料理や掃除を自ら行う「主婦」は，ブルジョワ階層の「一家の女主人」maîtresse de la maison とは異なる新たな概念として登場し，民衆層を中心に受け入れられつつあった．松田祐子『主婦になったパリのブルジョワ女性たち —— 100 年前の新聞・雑誌から読み解く』大阪大学出版会，2009 年，103 頁．

22） Nougatine, «Notes d'une jeune ménagère», 29/04/1894.

23） Ibid.

24） «Une question par semaine», 30/06/1895.

25） F. Grèzes-Rueff et J. Leduc, *Histoire des élèves en France,* Paris, 2007, p. 231.

26） B・スミス前掲書，189 頁．

27） M-F. Lévy, *op. cit.,* Paris, 1984, p. 10.

28） 『ラ・ファミーユ』の引用記事において，「教育」

と訳出しているものの原語は，全て éducation である．

29）Cendrillon, «Chronique ; Pour les mamans», 20/09/1891.

30）H. Avenel (dir.), *Annuaire de la presse française et du monde politique,* Paris, 1900, p. 94.

31）中綴じの挿絵は，見開きで掲載される場合があった．

32）J-P. Bacot, *La presse illustrée au XIXe siècle ; une histoire oubliée,* Limoges, 2005, pp. 163-164.

33）浅田有紗「えがかれた植民地主義 —— 19 世紀末フランスの新聞 *Le Petit Journal SUPPLÉMENT ILLUSTRÉ* にみる」東京外国語大学大学院総合国際学研究院修士論文（未公刊），2009 年，12 頁．

34）「今号の挿絵」«Nos gravures»/«Gravures» は，表紙絵及び中綴じの挿絵の解説を行う囲み記事．挿絵の解説や出典に加え，記者（無記名）の感想が手短に述べられている．

35）「今号の挿絵」において，① 記者が，被写体の行為に何らかの教育的意図があると解釈している，② 教育者と被教育者の（血縁）関係が明記されている，の二点を基準にした．

36）祖父が父親の登場回数をわずかにしのいでいる点については，19 世紀末にかけて，共和派エリート層において教育者としての祖父母イメージが定着したことが指摘できる．V. Gourdon, «La vision des grands-parents éducateurs au XIXème siècle : du repoussoir au modèle», *La revue internationale de l'éducation familiale,* 2001（vol. 5, n. 1）.

37）河合務「フランス第三共和政期前期における『父権』批判と児童保護政策 —— Th・ルーセルと 1889 年児童保護論争」『日本教育政策学会年報』2001 年（第 8 号），141-142 頁．

38）«Nos gravures ; La petite cuisinière», 05/01/1896.

39）M-F. Lévy, *op. cit.,* pp. 69-70.

40）«Nos gravures ; L'attention distraite», 15/01/1882.

41）«Nos gravures ; Une leçon de stratégie», 08/06/1890.

42）«Nos gravures ; La réprimande», 02/10/1898.

43）«Nos gravures ; Le petit bain», 02/08/1896.

44）«Chronique ; Noel», 27/12/1896.

45）«Chronique», 31/12/1882.

46）«Nos gravures ; Maman qu'il faut dormir», 15/04/1894.

47）«Nos gravures ; L'amour maternel», 23/03/1880.

48）«Chronique», 03/04/1898.

49）«Une question par semaine», 22/03/1896.

50）«Chronique ; Un père de famille», 11/01/1885.

51）100 年余りにわたってフランスで愛読され続けた女性週刊誌．1879 年に，ブルターニュ出身の実業家で，後にコート・ドュ・ノール県の上院議員を務めたシャルル・ユオン・ド・プナンステによって創刊される．1893 年には 21 万部，大戦前夜には 50 万部もの発行部数を数えた．

52）以上については，日本西洋史学会第 61 回大会（2011 年 5 月 15 日，於日本大学）において，「19 世紀末フランスにおける『家庭教育』像 —— 週刊誌『ル・プチ・エコー・ド・ラ・モード』の分析を中心に ——」として執筆者が報告した．

53）創刊者のユオン・ド・プナンステは，右派の政治家として活躍した人物であり，政府の教育改革や植民地政策に対し，反対意見を表明し続けた．*Dictionnaire des parlementaires français le 1er mai 1789 jusqu'au 1889,* Paris, 1889-1891, p. 377.

54）F. Buisson, *Nouveau dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire,* Paris, 1914, p. 213.

The Image of Family Education in the End of 19e Century : A Study of the Weekly Magazine, *La Famille*

Mizuhi IOKA

GraduateSchool of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto, 606-8501 Japan

Summary This article mentions the image of family education in France at the end of the nineteenth century based on the analysis of weekly magazine *La Famille* (1879-1921). At the time of the publishing also was the official education system established in France.

La Famille was a popular family magazine and the target reader was the middle class who were familiar with Republican ideology.

It represented an image that mother would bring up her children in a warm and loving home atmosphere. The mass-production of the magazine indicates the spread of family education which is characterized by mother love, and it is independent from school education.